

「新消化器病学 2. 肝・胆・膵」

筑波大学教授・内科 大 菅 俊 明
 大阪市立大学教授・公衆衛生学 門 奈 丈 之 編集
 旭川医科大学助教授・第2内科 建 部 高 明

国立病院医療センター院長

織 田 敏 次

この度、医学書院より「新消化器病学 2. 肝・胆・膵」が刊行された。筑波大学大管教授、大阪市立大学門奈教授、旭川医科大学建部助教授の編集で、執筆者も102名、それぞれお得意の部門を担当しておられる。編集者も若く、それだけに執筆者も近い。新鮮さと熱気をさ感ぜさせてくれる。

開いてみると、美しいカラーページ、型通りの目次に続いて疾患索引にぶつかる。まずは病名から整理、整頓というスタイルであろうか、あまりお目にかからないスタイルである。確かに病名も定義からという趣向に、なるほどと首肯される。消エネ時代の頭の整理に相応しい。学生の講義には筆者も好んで用いた方法ではある。

そのように、本書の狙いはいわゆる臨床の教科書、特に研修医、レジデントを対象のガイダンスとしての役割は大ききろう。診断学から始まるのは当然であるが、形態も機能も肝・胆・膵を切り離すことなく、できる限り総合的に扱ってみようというのも、1つの新しい試みと受け取れる。縦割の進むなか、少しでも統合をと、その努力は評価に値する。

病態の理解も、黄疸と胆汁うっ滞、腹水と門脈圧亢進症、肝疾患と腎疾患、慢性肝不全と肝性昏睡といった具合に、症候と病態ないしは病態と病態とを結びつけることによって、少しでも立体感を醸成することができればとの工夫が滲む。いわゆる平

板な知識を避け、実地の臨床にも動的な対応が可能にという、そういう意図も十分に感じられる。

先ほどは教科書という形容を用いたが、いわゆる羅列的な型通りの教科書ではない。プライマリー・ケアへの指向は時代の要請でもある。卒前、卒後の医学教育がにわかに関心と呼び、これも石油ショック以来の低成長期が生んだ落とし子とも言われる。とは言え傾聴すべき点も多々あることは言うまでもない。しかし一方では、super-specialistの養成も忘れてはならない。これもまた一般の声として確かに聞かされる。要は価値の多様化であり、それぞれに対応できる教育カリキュラムが、いわゆるレストランのメニューもどきに揃えられなければならないのであろう。せっかくの国組織であるならば、そのようなメニューも少なくとも国内、好ましい形で整理、整頓されるのが望ましいはず、できる限り早急に対応すべき事項と考えるべきである。

さて、次は各論にも相当する肝臓病学であるが、戦後の40年間、最も進歩を見せた分野であるだけに、気分新たに対応していただきたい。その中核をなすものは、言うまでもなく肝炎ウイルスの登場である。それを土台にしたうでの肝疾患の理解でなければならない。黄疸に始まる肝炎は昔もあった。それのみではなく、いわゆる無黄疸性の肝炎、あるいはその延長こそがつくり出す後

遺症、ないしは終末像としての肝硬変、ひいては肝癌まで、実地臨床の場に把え直すことから事が始まる。今でこそ当然のことと思われるのであろうが、ウイルス無き時代の肝臓病になんとも表しがたいもどかしさを味わってきた筆者らにすれば、やはりある種の感慨ではある。しかも、いわゆる先進国にあって、B型肝炎の淫浸をこれほどに受けていた国はわが国をおいてなかった。それだけにpost-virusの肝の臨床は、それこそわが国の業績が先鞭をつけることになる。sero-epidemiologyがまずは先陣を承る。次は予防にも成功するのだが、臨床となれば、それはウイルス炎症の持続性がもたらす病像の理解を、時間の因子を加えながら可能にしていってわが国の臨床研究の功績が高く評価されなければならぬまい。肝のウイルス発癌の課題で、肝を場としての研究に大いに熱がこもる。

もっとも、肝臓を障害する因子には、ウイルス以外にもアルコール、薬剤を含む中毒性因子は昔ながらのテーマである。ウイルスに対する生体防御反応と十分に比較研究がなされるべきものであることは言うまでもない。あくまでも免疫学的な理解を含めた生体防御機構の試練の場としての肝臓である。

このような観点を踏まえながら、専門家の記載に傾注、理解を深めていただきたい。言うまでもなく、より今日的な新しい知識が、より簡潔な表現によって順序よくまとめられている。更には肝臓の周辺を取り巻く胆道系ないしは膵疾患についても、相互の関連性に十分な配慮がなされていることも本書の特徴と言えるよう。

消化器疾患の臨床にあたって、まずはその総合的な基本知識を得るのに格好の書と思われる。

B5判 702頁 図223 写真361 原色図78 1987 ¥23,000 ㊦400

医学書院 刊